

# 4

## 研修会参加者の声

Q1 「コミュニティや地域の創生」を出発点として  
認知症支援を考えるとき、大切にしたいこと。

Q2 互恵関係：だれもが主役、「する人」と「される人」の  
構造にならない仕掛けのアイデアは？

Q3 では、何をしてみようと思いますか？

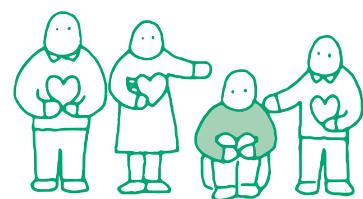
Q4 次世代に引きつぎたい、豊かな社会、  
幸せな社会のイメージは？

Q5 その社会の実現に向けて、多様な人が集まって  
対話をする意味は？



Q1 「コミュニティや地域の創生」を出発点として  
認知症支援を考えるとき、大切にしたいこと。

- 楽しさ、役割、居場所を出発的に考える～自分が「参加したい」と思える仕掛けを考えること。
- 自分も何か人の役に立っていると感じることが幸せを感じるとき。
- 人に何かできることは幸せ。支えられっぱなしはいやだ。だれでも、できることはある。
- どんな人でも人から必要とされることを喜びと感じると思う。認知症だから、障害があるからと決めつけず、それでも必要とされれば一步踏み出す出発点になると思う。
- 思いや考えを共有し、自分が参加することで、自分も他者も“良かった”と思える場があることが素敵。何のこだわりもなく、いろんな人が集まる事が楽しい。
- その活動によって自分が元気になると感じないと継続はむずかしい。はじめ集まる人が楽しく活動されていないと、仲間は増えない。活動を通じて幸せだと感じる人が増えれば、仲間が仲間をよんで活動が増える。
- 自分が楽しいなら、やってみたい、続けてみたい。その気持ちが、友達や周囲の人をまき込む。大きな輪になる。始めてみなければわからない。
- むずかしい課題を考えるより、わかりやすくハードル低くすると発想が柔軟になり、いっしょに活動すると、偏見や特別視がなくなるというメリットがあると思う。
- だれかといっしょに楽しい時間を過ごしたい、と思うことが長く続いていく基本では？
- 参加者を限定するのではなく、だれでも、高齢者も、子どもも、障がい者も、引きこもりの人も、すべての地域の方々に参加してほしい。参加者協力者と分けるのではなくみんな平等で。
- 多世代交流、多国籍交流が自然に行えるような「場」があることは、とても嬉しい。

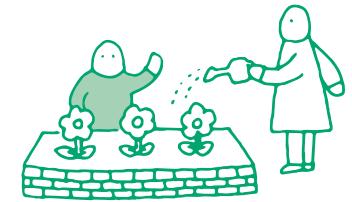


## Q2 互恵関係:だれもが主役、「する人」と「される人」の構造にならない仕掛けのアイデアは?



- 「だれのため」ではなく、自分がやりたい、必要と感じていることをすればよい。
- 全員に役割がある、だれもが与える人、存在を認め合い感謝することを基本に。
- 一人ずつ、一つでも自分の考えを出していく。どんなアイデアも否定しないで話し合い、笑う事が大事。
- 人は何らかの役に立ちたい、「人のため・世のため」という思いは、人としての共通点と思う。感動する事が多いような仕組み、心が動く笑顔が多く見られる仕組みづくりを。
- 自分の得意なことをのばす。
- 参加者の得意なことを引きだし、場をコーディネートする人が必要。
- みんな同じ方向を向いて、一緒に取り組むこと～始める前に、思いを共有・共感しておくことが大切。
- だれかを支援するという視点でなく、「皆で何かをする」という目的をもつこと、“場づくり”を考え、その中で自分が何が貢献できるかを考えること。
- 場づくりの共同作業をしていく過程で、人の個性が見えてくる。発足から場をつくる過程、話しあいを丁寧にする。
- 問題に蓋をして見て見ないふりをするのではなく、解決策を発言しあい、意見を出す場づくり。
- 1ヶ所で何もかもではなく、いろいろな場があり、地域で選択肢があると良い。
- どうしても福祉的な発想が多いが、お金をもうけることを考えてみてはどうか。
- 地域の共通のテーマですすめる上で“食”は入りやすい。他に「住んでいる地域を知る」という欲求をみたす“わが町探検”も良いと思う。イベントから始めて定着をめざす。
- とにかく、長く続けることが大切と思う。
- できることから始めればいい。まず始めてみて、走りながら考える。やりながら創りあげていく。

## Q3 では、何をしてみようと思いますか?



- 人を支えるのは、場所・制度ではなく“人”。人のつながりを見つけていく。
- 自分で、仲間作りから始める。
- 気持ちがあって行動に移そうとしている人を支援していく。～ 会を立ち上げる行動力・時間の余裕は自分にはないが、手伝うことならできる。
- 社会的な問題を“認知症”に偏らない支援で考えると、どんどん可能性が広がるように思う。まずは、自ら腰を上げ、動き出したいと思う。
- 事業での人の集まりの場を活用してみるか。(公園の花壇の手入れ、神社掃除等)
- 自分がだれかといっしょに何かやるのは楽しいことだと思う。自分が、やるんだなあ、他の人ではなく。いろんな人たちと。
- 近所で独居・高齢者の方の把握をして、訪問、関係作りから始めてみる。
- 自分が楽しいという思い、役に立ちたいという思い。子どもの世代には住みよい社会、地域になってほしいので、今がんばりたいと考えている。
- 農業を少しやっているので、少しでも使ってもらって食を作り、つどいを始めたらと思う。
- 私も退職したので現在、認知症のことを少しずつ地域の方々に協力していただいて場づくりを進めている。まず勇気をもって出発します。
- 仲間作りからはじめて、“だれでもカフェ”を創っていきたい。
- サロンでその人の特技などを披露したり、講師になって安い金額で教えるなど、一人ひとりが主役になれ、役割のある構造を地域で作っていく。
- 40代の自分も参加する場を創っていきたい。
- 新しく施設を作る発想ではなく、図書館・学校・大学など、既存の施設を開かれた場にする工夫をして、どんどん、市民が入りこんでいく。
- (行政職から)行政がいかに黒子になれるか、地域のことを地域で考える場作りのために、制度・補助を広く公表し、地域の皆様の第一歩の後押しになれるよう。

**Q4**

次世代に引きつぎたい、豊かな社会、  
幸せな社会のイメージは？



- みんなちがって、ちがうからよい、「個」を認められる社会差別や偏見のない社会。それぞれの個性が尊重され評価を受けられる多様性を持った社会。人と人とがつながりやすい社会。だれもが安心できる、参加しやすい社会。
- 対話で関係性を作っていく。人と人、だれかとつながっている関係。どんな人でも集まり、話し、笑い、自分が何らか参加する、小さな参加、手伝いでも“ありがとう”が返ってくる。何か自分が役に立っているという実感を持つことが大切。
- より多くの人が多くの人の幸せを願う社会。そのために、まずは自分自身が幸せを感じ、満たされること。自分が苦しいのに他人を思いやることは辛いので、精神的に豊かな気持ちを持つこと。
- お互いに満足して助けて生きていける社会。
- 地域の人々が笑顔で楽しんで参加できるコミュニティ、無理矢理ではなく自らが参加したいことがある社会（生活）。
- ひとりひとりの得意を活かした役割と不足を補い合える関係作りが確立され、心豊かに暮らせる社会。
- 生きている事が“楽しい”と思える社会、何歳になっても笑っていられる周りの環境があるといい。“役割”というのは、とても大切な生きがいと思う。だれかのために何かのために、自分ができる事をやって役に立つ、それが自分自身に対しても笑顔になれる事ではないかと思う。
- 自分の住んでいる地域でゆるやか以上には人とつながっている社会。強くご近所付き合いする人、あいさつだけで地域以外の社会と強くつながる人がいてもよい。ただ、たとえ自分からつながれない人がいても疎外されない地域があること。また、自分自身の生き方、それぞれの希望に合わせて（それまでの生きてきた道に応じて）、必要な人だと感じられる居場所があること。その選択肢がたくさん存在し選びやすいこと。
- 介護する人と介護される人が共に笑い声が出るような環境・安心と安全が最優先で過ごせる社会・お互いにプライドを傷付けることがない関係・助け合いの仕組みを作る。

- いくつになっても障がいをあっても、社会活動や楽しみをもって普通に生活できる社会。それがあたり前になると、年をとることや認知症になることにも不安はなくなり、若い世代にとっても希望をもって人生が送れる社会になるのでは？
- 生かし、生かされていると感じる社会。人は一人では生きられない。特に高齢者は社会的役割を継続し、障がい者は、存在すること自体に役割があることを自覚し、社会参加に前向きになってほしい。全ての人が地域社会の財産。
- 高齢者及び若者との対話の場を作りたい。すべて若い世代におんぶに抱っこではなく、高齢者も自分の得意な分野で活躍できる。
- 高齢者が多ければ子ども支援が細かくできるはず。それができる社会づくり。垣根のない社会。全ての人が笑顔でいられる社会。
- 貧困家庭の子どもがいるし、引きこもりの子どももいるし、その子ども達がなんとか暮らしていける地域を今から作っていきたい。
- 子どもも大人もお互いに自分のできる範囲で協力して、生活できる社会。高齢者であれば、これまで自分が培ってきた技術や経験を生かし、ボランティアや、子育てのサポート、教室を開催するなどで自分の役割がある社会。子育て世代では、安心して子供を預けて、仕事を集中できる地域。子どもにとっては、困り事などや、勉強、遊びを教えてくれる大人がいつも側にいる社会。
- 子ども世代が、老いを感じられる社会。
- 学びあい、働くこと。学びたくても今はお金がかかって学べない。どの年代でも、教育が自由に受けられる学びの場があり、世代を超えて学友ができる社会。

高齢者が増えた（残った）団地内に若い子育て世代も増えるよう家賃も含め考慮して、買い物、交流できるようにしたい。1～2時間の子守りなら、高齢者が世話をし、子育て世代の支援をし、子育て世代は高齢者の買い物を自分の買い物ついでに行うとか助けあえる。  
このような助けあいができると相互のメリットになる。高齢者は役割を持ち若い世代は子を見守ってもらえる。お互いに必要としあう関係から自然にコミュニティが生まれるのでは？



## Q5 その社会の実現に向けて、多様な人が集まって対話をする意味は？



- 他人から教えてもらう大切さ、勉強ではなく心で学ぶ。自然な学び事を忘れないようにする。
- 他力本願な社会であってはならない。いろいろな人が集まって自分達で考えることが大切。
- 高齢者や認知症の事だけでは対応は広がりがないという事。地域の構成員の全てが向き合い、多様な地域課題について、コミュニティについて話し合い、検討していく事で“誰かのものではなく、自分たちの地域、自分たちの居場所”を考え作っていく事につながるのだと思う。
- 話し合いの中でよりよい社会のイメージが構築されるのではと考える。そのためのキーワードは多様性。時間はかかるが、多様性を受け入れるために話し合い、できる小さなことから始めていくことかなと考える。
- キーパーソンは私達団塊世代。私達世代が今の社会をどう考えどう補えるかだとつくづく思った。私達は家族・地域から人とのつながりを伝えてもらった。これからは当たり前のつながりを少しでもおせっかいに伝えていければと考えている。対話からはじまる事ばかりなので。
- 足りないものをいただき、差し出せるものは受けとめることによってすべてが生きてくる気がする。夢ではない社会が実現すると思う。
- お互いに良い所を尊重しあう、見本を学ぶ。
- 子どもの若いエネルギーが高齢者へ流れ、地域全体が活性化する。
- 役割と居場所を持ってふれあい、交流が生まれる。人と人という関係性を大切にしていっしょに考えて行く場が大切。
- 一人ではできなくても、皆がいることで大きな力となり、町を動かす活力となるかもしれない。
- 一人ひとりが幸せな社会のイメージを思いえがくだけでなく目標達成のために活動することが大切。自分の幸せは、他人の幸せを願うことである。
- 話し合うことによって解決していく場を継続していくこと。
- あらためて人間一人では生きていけないものだと感じた。多くの人の意見を聞く、あわせるのはたいへんなことだが大切なこと。交わる努力をしないと平行線のまま。

- それぞれ立場も考え方もちがうと思う。どの考えが正しくて間違ってるかなんて分からない。どの考えも否定してはいけないというルールを作り、話せるとよい。
- それぞれの立場でのごとを考えることができる。人との対話の中で、自分のできること、人の役にたつことを明らかにできる。
- だれもが、話せること、聞いてくれることで、心にエネルギーを育てて行くことだと思う。生きて来た人生を表現する。その人のプライド、価値観を表現できる場であれば素晴らしいと思う。
- 個人がもちうる専門性には限りがある。自分では思いもつかないことを、別の視点からいただけることもある。持ち寄り、頼れる関係性が地域にもてたら素晴らしい。
- 一人が無理をしなくてもよい。お互いに知恵を出し合い、助けあう。できる人ができる時ができる事をする。
- 障害がある人もない人も、皆が地域作りをしているんだよという意識作り。動機はどうであれ「共に生きる」を知っていただきたい。
- 何よりもいろいろな人が集まつたらできることが増えるし、楽しいと思う。楽しくないと続かないでの、がまんする人がいては良くないなと思いました。がまんしなくともいいんだなと気づかされました。一社会から孤立することから回避できる。困難・問題を解決する方法を見つけ、実現・行動する原動力を得る。「楽しい」は生きる喜びにつながる。
- 子どもは、学校帰りの時に、ふらっと立ち寄れるような場所、大人は、そんな子どもを温かくむかえてあげられる場所作り、いろんな世代の人が交流することで、対話も生まれる。地域で子どもを育てていくことができる。

